

思い出だけは守るために

〈登場人物〉

田所 和正 ……主人公。優奈の幼馴染。前期はいざこざがあったが、現在関係を修復中。

市川 優奈 ……ヒロイン。幼馴染。和正との関係を修復中。

大崎 浩司 ……バスケット部。優奈に目を付けている。

笹井 大吾 ……バスケット部。浩司の取り巻きの不良。クラスメート。

筒井 文雄 ……優等生。クラス委員。和正などには強気だが、浩司達に対しては弱気。

相沢 千絵 ……和正のクラスメート。

石井 奈津子 ……和正のクラスメート。チアリーディング部。

植田 和美 ……和正のクラスメート。チアリーディング部。

渡辺 芳雄 ……和正のクラスメート。野球部。

北村 春子 ……和正のクラスメート。

時田 信彦 ……野球部。先輩。野球部のエース的存在。チアリーディング部から性的な奉仕を受けている。優奈をレイプしようと思っていたが、まだ未遂。

小松 俊夫 ……野球部。先輩。

稲葉 純一 ……野球部。先輩。

浜崎 法子 ……和正の担任。

杉田 聡 ……教員。妻子持ち。理科の教員。夏祭りの日、法子と共に居た。

今井 松子 ……保健室の養護教諭。

第七章 一緒に

蒸し暑い、薄暗い教室ではセミの声が響き、日下部の流暢な英語を邪魔する。

和正は鉛筆を回しながらテキストに目を落す。ミミズののたうち回るような筆記体を眺めつつ、補習が終わるのを待っていた。

「田所、居るか！」

そんな中、またも杉田が教室へやってきた。何かと自分を目の敵にする杉田にうんざりしつつ、和正は軽く返事をする。

「はい、なんですか？」

「なんですすかじゃないだろう。お前、またもめ事を起こしたそうだな。聞いたぞ。祭りで喧嘩したんだってな！」

和正を叱れる口実があるのがよっぽど嬉しいのか杉田の顔には喜びが透けて見える。笑顔無理やり顰め面にした歪な顔を見て、和正は聞こえないように舌打ちし、立ち上がる。

「待ってください。今は補習中です。さ、田所君、席に戻って」

日下部は杉田を制し、押し返そうとする。

「日下部先生、私は田所への指導がありましてですねえ」

「奇遇ですね。私も田所君に指導中なんですよ」

「彼は問題児なんです。普段から喧嘩ばかりして反省もせず、さらには祭りで喧嘩をしますねえ」

「祭りで喧嘩なんて江戸っ子ですねえ」

教室から笑いが起きる。

日下部はおしが強いけれど、ひょうひょうとしてつかみどころが無い。当人はユーモアを学ぼうと色々努力しているらしく、ときおりずれたことを言い失笑を買う。それでも、その努力も買われていた。

「お前達、笑っているんじゃない。真面目にやれ！」

対し杉田は頭ごなしに怒る。なので不評を買うばかり。

「日下部先生、俺が居ると補習が進まないっすよ。すみません。ちよつと出ていきます」

この押し問答で補習がおしても良いことがない。和正は荷物を纏めると宿題に出されるプリントを受け取り、教室を出た。

「見てください、あの態度。彼はああいう奴なんです」

「ふう、困ったものです」

「全くです」

同意しているように見えるが、隔たりのある二人……。

指導室へ通される和正。案の定、他には誰も居ない。一方的に責めたて、停学をちらつかせるには他の人が居ると都合が悪いのだろう。

「なんで呼ばれたかわかるか？」

「さっき杉田先生が説明してたじゃないですか。俺には身に覚えがないですけどね」

「減らず口を……。お前は全然反省しないんだな！」

「だから、なんのことだか知りませんよ」

前のこともあり、簡単には後を取らせまいと正面を向く。

「聞いたぞ。お前、祭りの時、筒井と喧嘩したんだって？」

「あんなの喧嘩なんて言わねーよ。あいつがダダこねただけだったの。っていうか、そんなに言うなら村役場の人に聞いてみればいい。揉め事あったかどうか教えてくれるだろ」

「お前なあ、そうやって自分の罪から逃げるつもりか！？ どうなんだ！」

「逃げてねーじゃん。役場の人に聞けばわかるって言ってるんだ。確かめるよ」

「そういうのを逃げて言うんだ！ よーし、お前がそういう態度ならそれでもいい。反省の色なしということで、次の職員会議でお前の停学を提案する」

杉田の態度から最初からそのつもりだったのは明白だ。和正は特にうろたえることもなかったが、心残りなのは優奈にまた心配させてしまうこと。

「そうやってやせ我慢がいつまで続けられるだろうな？」

「……おっほん！」

廊下で存在感を伝えるための咳払いがする。声から教頭だとわかる。同時に杉田は慌てだし、急に直立不動になる。

「失礼しますよ。杉田先生」

「はい、なんででしょうか、教頭先生」

「いえね、杉田先生が指導熱心なのは知っておりますが、どうもやり過ぎているように思えてですね……。ええと、田所君ですか？ お祭りで役場のボランティアをしてくれたと聞いておりますよ。お礼の電話が来ています。特に喧嘩の話は聞いていませんでしたが、本当に喧嘩をしたんですか？」

「それは、その……。生徒から直接聞きましてですねえ」

「でも田所君は否定している」と

「こいつはよく嘘をつきます」

「鍵の事や理科の実験中の出来事でしたら、彼よりも疑わしい人がいましたが？」
暗に杉田を詰める言い方に彼は奥歯を噛みしめる。

「先生はどうも特定の生徒に固執しているように思います。休み明け前に一度担任、教科担当を見直す必要があると思いますが、いかがでしょうか？」

「わ、私は反対です。彼らも来年は受験を控えておりますし、急な担当変更は皆に混乱を与えるようで……」

「こうして針小棒大、火のない所に煙は立てられても困ります」

「教頭先生、私はですねえ、彼の生活態度の改善を望んで……」

「率直に申しますと、先生の指導方針には行き過ぎと感じます。理解できない部分も多々あります。今回の田所君の祭りの件、私が預かることにいたします」

「……わかりました」

「さ、田所君は補習に戻りなさい」

「はい」

教員の関係などに疎い和正だが、杉田が生徒教員ともども疎まれつつあるのかもしれない……。

補習を終えて家に帰る。いつもなら芳雄と一緒にプールへ行くのだが、今日は優奈と勉強の約束があった。

三月の決意は今も頭の隅に残っているけれど、祭り後の優奈の雰囲気がおかしかったことの方が気になる。

このまま意固地になって初志貫徹できるほどのんびり屋でもない。それと英語の課題の手伝ってほしかった。

普段着に着替え、鞆に辞書を追加して家を出る。

待ち合わせの場所まで自転車なら急げば五分。汗だくだと急いできたと思われるかもしれないが、格好つけているよりも早く会いたいと急いだ。

「……そうやって逃げるのかい？」

「……別にそういうつもりじゃないけど……」

「……なら、どうしてゼミを休んでこんなところに居るんだい？ 僕はてっきり夏風邪をひいたんだって心配してたのに」

「……うん」

「……君はそんな弱い人じゃないはずだ。だから一緒にがんばろうよ」

バス停近くへ行くと、優奈と文雄の姿が見えた。文雄が彼女に詰め寄っているようで俯いている。

「おい、何してるんだ？」

午前中、祭りでのいざこざを杉田に垂れ込まれていたことが頭をよぎり、つい強い口調で言ってしまった。

「わあっ！ ……な、なんだ、田所か。驚かせないでくれ」

「？」

変に怯えた様子の文雄は和正を見てほっとしていたようだった。

「和正君」

優奈は顔を上げると、ぱっと笑顔になり歩み寄る。

夏に涼しい水色のワンピース姿の優奈は去年と何も変わらない……。

「んじや行くか」

自転車の荷台に優奈を促す。

「待ちたまえ、自転車の二人乗りは法令違反だ」

「ん？ ああ、まあ、そうだなあ」

片田舎、そんな法律をまともに守る者もない。和正は少し困ったように頬を掻きつつ、無視する。

「待ちたまえと言ってるだろ。僕は優奈さんとお話をしていたんだ」

「ごめんなさい、筒井君。明日はちゃんとゼミに出るから、それじゃあ」

優奈は軽く頭を下げると荷台に乗り、和正の背中にしがみつく。

「おい、あんまりくっつくなよ。暑いんだから」

「いじわる。去年はそんなこと言わなかったのに」

思い起こすと去年は優奈もそれほど引っ付いてこなかった。けれど、今日は……？

背中に薄い布地のワンピース。そのかすかに伝える弾力はきつと優奈の……。去年はそれほどでも無かった気がするが……？

鬼瓦高原公園は和正の秘密の場所。といっても地図にも出ていない。子供の頃、学区外だった為に行動範囲を制限されていたからにすぎない。

それでも子供の頃の和正にとっては秘密の場所だった。優奈の我儘に押し切られるまでは……。

「そこはこの訳し方だね……、一つのくくりとして覚えておくといいの」

「ふーん、なるほど。ああ、本当だ。辞書にも書いてあるや」

英語の課題を教えてもらいながら進める和正。やはり優奈に直接教えてもらえると進度が違う。いつもなら夜中の十時までかかってようやく終わって、次の日×印ばかりで返されるというのに、優奈の指導の下だと一時間とかららずに半分以上終わってしまう。

「さすがだな。優奈。ホントお前、教える才能あるよ」

「そんなことないよ。和正君だってちゃんと勉強すればできるんだよ」

「そうなのか？ 俺はよくわかんねーけど」

「そうだよ。前は一緒に勉強したら赤点にならなかったじゃない？」

「まあそうだな」

「片意地はるから」

くすくす笑いながら頬を突く優奈。くすぐったそうに被りを振り、むっと彼女を睨む。

風がでてきて涼しさのある昼下がりが。いつの間にか雲がでてきていた。

「ん〜、暑い……なあ」

涼し気に見えるワンピースだけれど、特有の蒸し暑さだけは拭えない。

「夏風邪でも引いたのか？」

「んーん、違うよ。ただ、ちよっと……」

「まあいいけど」

熱中症対策に途中で買ってきたペットボトルを取り出し優奈に渡す。

「ありがと。んぐんぐ……」

「ごくごくと飲む優奈はよっぽど暑かったのだろう。」

「あ、ごめん。和正君の分まで飲んじゃった？」

「いや、別にいいよ。俺は出る前に飲んできたし、そんなに汗かいてないから」

「でも、ちゃんと水分とらないと熱中症になっちゃうよ？ 大変なんだから。私も前に倒れて大変だったんだから」

「そうなのか？ どこで？」

「えっと、チアリーディング部で……練習終わった後……」

話しながらだんだんと声が小さくなってくる。表情も徐々に険しくなり、不意にペットボトルを手放してしまう。

「がこんと音を立てて中身をぶちまける。」

「あ、ごめん。落しちゃった」

「なんだよ、あーあ、全部こぼれちゃった……。一体どうしたんだよ」

中身が無くなったペットボトルを逆さに振り、蓋をしめる。

「ごめん……、弁償する」

「いいよ、勉強教えてもらったお礼だ」

険しい表情になる優奈に気圧され気味の和正は話題を変えようとプリントに視線を落とす。

「それよか優奈、どうかしたのか？ やっぱり体調が悪いんじゃないか？ 熱あるとか？」

「んーん、大丈夫」

「ゼミ、休んだのって言ってたし……」

「うん。ちよっとね。大丈夫。明日はちゃんと行くから」

「そうか。ふーん。まあ、優奈も頑張り過ぎなどこあるし、たまにずる休みしたほうがいいのかもな」

「そう、かな……」

「ああ。ま、俺みたいにならければなしのもアレだけだな」

がははと笑いながら坊主頭を掻くと、優奈もくすすと笑ってくれた。

「うふふ、和正君も頑張って勉強して、同じところに進学できるように頑張ってよ」

「おいおい、無茶言うなって。むしろ優奈が俺に合わせてくれよ……なんてな」

またもがははと笑う和正だが、今度は笑ってくれない。

「ああー、その……なんだ。冗談だって……」

「そうしたら、和正君と一緒にいられるのかな……」

「……おいしい、何言ってるんだよ。冗談だろ、冗談。優奈は頭良いんだから、俺に合わせるなんて馬鹿なこと考えるなよ」

やはり落ち着みが見える優奈に和正は慌ててしまう。

お祭り前後でゼミの試験でもあって、その結果が芳しくなく、そのことで文雄から叱咤激励を受けていたとか？

色々思考を巡らせるも、導かれる推測への答えがセットで見つからず、次の言葉がつむげない。

「ふふ、それならやっぱり和正君が頑張ってる私に合わせてよ。ね？」

ようやく笑ってくれた優奈はどこかぎこちない。

「おう、前向きに検討しといてやるよ」

今はそう答えるのが精いっぱい。ひとまず目の前の課題を終えたところで和正は伸びをする。外は涼しいけれど、蚊も多い。虫忌避スプレーを使っているけれど徐々に耳障りな羽音が聞こえてくる。

「そんじゃ帰るか？」

「え、もう少しお話しようよ……」

ぐずる優奈だが、ぽつぽつと雨が降り始めたことに「あ」と短く言う。

「傘なんて持ってきてないぞ。しゃーない、急いで帰るか」

「傘ならあるよ。ほら、一緒に入ろう」

「いいよ。二人で入ったら濡れるだろ」

「だって、和正君こそ風邪ひいちゃうよ」

「バカだからひきませ〜ん」

「今日は昨日より勉強できるようになったでしょ？ その分だけ引きやすくなりまし
た」

そんな優奈の軽口に元気を感じたのか、和正も笑顔になれた……。

自転車を押して公園を出る。鞆には明日の課題が入っており、濡れないようにとしっかりガード。

そんな不格好な和正を優奈はくすくす笑っていた。

「うふふ、変な恰好」

「仕方ないだろ。日下部先生、結構あれで敵しいから」

「日下部先生はねえ……」

小さな折り畳み傘を無理に和正にもかかるように構える優奈も徐々に雨に濡れていく。

通りに行く原付が水たまりを走り、二人にびしゃりとかけていった。

「おい、気を付けろ！」

走り去る原付に文句を言うと、しばらく行ったところでびたっと止まる。聞こえていたのだろう。なぜなら二人乗りの原付はスピードも遅く、ノーヘルだったから。

「あーん、チビが何いきがってんだ〜！」

降りて来たのは浩司と大吾。二人は鼻息荒げてやってくる。

「お前ら免許取れたのかよ。しかもノーヘルとかありえないだろ」

和正は頭をトントンと指で示しながらあきれたように言う。

「うっせーな、自転車しか乗れないガキンチョは黙ってろよ。っていうか、このことちくるなよ。うぜーから」

言葉こそ強気で乱暴だけれど、ニケツノーヘル無免許を報告されては分が悪い。なんとか脅して口封じしようとしているのが見える。

「ん？ 優奈ちゃんじゃーん。どう？ おまたの具合は？」

「……」

そんな二人を余所に浩司は優奈を見てにやにや嗤う。

「頭の具合はお前こそ心配しろよ。ちくらないでおいでやるからさっさと失せろ」

優奈を背中に庇い、浩司に詰め寄る和正。その態度にむっとしたのかにらみ合う二人。

「お前なあ、イインチョの前だからって格好つけてんじゃねーぞ」

大吾が口を挟むが、和正が結構暴力的なこともあり、うかつに手が出せない。

「和正君、やめようよ……ね？」

怯える優奈は和正の服の裾を掴む。不安が伝わってくるのを考えると、ここで粹がってやり合うのは優奈を悲しませるだけではない。ここは折れるべきかと悩んでしまう。

「お前さ、いいわけ？」

「なにが？」

「今度揉め事起こしたら停学だぞ？ 普通大人しくしようって思わないわけ？」

「普通はそうだろうな」

「ふーん、そうやって粹がるんだ」

「やってやろうか？」

「和正君！」

「……悪い、言い過ぎたよ」

「はは、だっき。女に止められてやがんの」

げらげら笑う二人に和正は舌打ちしつつ堪える。

今も降りしきる雨。車通りも無いわけではない。そうなった時に不利なのは浩司達。冷静に考えてとりあえず事を荒立てまいと我慢する和正だった。

「まあいいや、こんなチビ……。それよりさ、ゆうなちゃーん。また今度一緒にプールい

こーよー！ ね？ いいでしょ？」

浩司は和正を押しつけ、優奈に詰め寄る。

「えと、それは……その」

「ね？ いいじゃん。そうしたら、俺も和正君と仲良くするよ。喧嘩なんてしないし〜」
「……」

「そうじゃん？ 友達の友達と喧嘩なんかしないって。でも、優奈ちゃんが俺の友達じゃないって言うんであればどうなっちゃうかな〜」

「おい浩司、お前ふざけるなよ」

脅しに近い浩司の提案に和正は怒り、その肩を掴もうとする。けれど大吾が立ちほだかる。

「邪魔だつての」

「そんなこと言うなって。お前こそ良いの？ 俺らと揉め事起こしたらお前、停学だよ？
インチョが悲しむよ？」

「今悲しませてるお前らが言うな。ほら、優奈、帰るぞ」

「……だ、大丈夫だよ。和正君……その、学校のプールでなら、その……みんなで行けるし……和正君も一緒に来てくれたら……ね？」

「おー、それでいいよ。みんなで一緒にプール行こうよ。早い方がいい。明日は？」

「明日はその、ごめん。ゼミがあるし……」

「えー！ それじゃあ後で明後日ね？ 午後から。おっし、きまり〜！」

「う、うん……わかったよ」

「おい、優奈、こんな奴らと約束する必要なんかない」

「うっせーな、俺と優奈ちゃんが仲良くしてるんだから黙ってるよ。嫉妬は見苦しいぞ」

「何が嫉妬だ。馬鹿いってんじゃねー」

「和正君……、大丈夫だから。大丈夫。お願い、ね……」

「優奈……」

熱くなる和正に冷水をぶっかけるのは雨でもなく優奈の不自然な態度。それ以上は何も言えず、歯ぎしりをしていた。

「それじゃね。ばいばい。あ、おい、和正、ちくんじゃねーかな？ わかってんだらうな」

告発したいのはやまやまだが、杉田や法子ならきつと和正の告発を握りつぶすだろう。仮に教頭先生や松子に報告したところで走り去った二人の違反行為の証拠も無い。

「……和正君、平気？」

険しい表情をしていると、心配した優奈が袖を引っ張り、顔を覗き込む。

雨と蒸し暑さの中、それでも震える彼女を見ると浅はかさが悔やまれる。声を掛けなければ気付かれることも無かったのに……。

「ごめん、優奈、俺、余計な事した」

「……仕方ないよ。私も笹井君と目、あっちゃったし……」

「……でも、プールなんてさぼっちゃえよ。行かなくていい」

「……そうもいかないよ。それに、和正君が来てくれたら私も安心だし……。いいよね？
一緒に来てくれるよね？」

「ああ。わかった。絶対に行く。だから、安心しろ」

「うん。ありがとう」

そう言ってニコリと微笑む優奈だけれど、まだどこかぎこちない。明後日は何があっても行かないといけない。

帰り道、和正は優奈の手を強く握っていたが、彼女は痛いと言わなかった……。

「フレツフレツ、オニガワラ！ ヤーン、サイコー！ ヤツチャエ！ イツチャエ！ サイコーにキモチイイ瞬間、一緒に感じたいのー！」

鬼瓦第二校の野球部は県大会予選、一回戦、二回戦と順当に勝ち上がっていた。

周囲の期待も徐々に高まりつつあり、応援の人数も多くなる。

例の恥ずかしい応援セリフは相変わらずで、男性の好奇の視線と、女性からの侮蔑の含まれた視線が痛かった。

「またまたやっちゃった！ これってこれって、まさかのまさかの、あたしたちの HATUJAIKENNー？ このまま一緒にいっちゃいたいよー！！」

純一の打球がセンターの頭上を越えた時、勝負もほぼ決まった。

「あーん、入っちゃう、はいっちゃうの……！！ いれちゃうの？ やっちゃうの？ あーん、あ、あ、はいっちゃったー！ もう、最期までいっちゃうよ、いっちゃおうよー！！」

ポンポンを置き、ティーンモデルがロリチックな印象をもたせようとするポーズを取りながら泣きそうな顔をする。野球部員から見えるはずがないのにどうしてそこまで細かい指示があるのかわからない。

優奈もばかばかしいと思いつつ、奈津子にお願いされて仕方なく演技していた。

「ゲームセット！」

主審の号令に鬼瓦第二校ベンチから選手たちがわっと駆け出す。まずは整列し、互いに礼をして、続いて応援席に礼をする。

歓声をもってそれを出迎える応援席の人達。そして……

「あーん、すっごいよ……。こんなにいっちゃうなんてしんじらんない！ このまこのまま一緒だよ？ 絶対絶対一緒だよ？ 最期の瞬間、絶対絶対感じさせてよね！？ 放しちゃだよ、一緒にイユうね最期まで！ さいつこうにきもちよくなっちゃおうね！！」

チアリーディング部がフェンスギリギリまで駆け寄り、前傾姿勢で野球部を労う。

腕で胸をぐいっとおさえる恰好だと衣装がたるんでしまう。見えそうで恥ずかしく、この応援方法も苦手だった……。

「ねえ、奈津子、あのさ、応援なんだけど、ちょっと変えない？」

帰りのバスで優奈は隣に座る奈津子にそう提案した。

「え？ あ、うん。優奈は嫌？ あたしは可愛いと思うんだけど……」

作り笑顔なのは付き合いの浅い優奈でもよくわかる。彼女は可愛らしくスタイルも良いけれど、性的な華やかさの薄い地味な子。ああいった応援は似合わない。

「あんなの可愛くないっしょ……」

反対側の席で窓を見ながら和美が言う。彼女は背が高く、スタイルもよく、やや鋭さのある美人系。彼女ならああいう応援の仕方もあるかもしれないが、当人は否定的。

「それに、衣装もなんか布地が薄いし、ちょっとその……」

「ニップレスとかしたほうがいいかもね。乳首見えるし」

「……えと、その」

和美の率直な言い方に優奈は口ごもる。

自分ではギリギリ見えていないと思っているが、和美のいうとおりなのだろう。それに応援中に不自然な機械音が響き、試合よりもチア部の衣装に目が行く男が居たことも……。

「それは……その、あたしの一存じゃ決められないから……でも、せっかく参加してくれるんだし、少し考えてみるよ」

「お願いね」

前向きな約束を取り付けることができたことで一応の安心が得られた。

後ろでは信彦達が、自分が一番活躍した、いや俺が、いやいや自分が……と言いつついるが、前のような暴力行為は姿を潜めた。話し合いが功を成している証拠だと安心していった。

「だーかーら！俺が一番なんだから、今日は俺がゆうなちゃんにマッサージしてもらおうのー」

俊夫の高い声が聞こえた時、優奈は反射的に振り返っていた。

「えと、その、私は今日用事があるから、残れないんです。すみません、先輩……」

優奈はやんわりと断るけれど、俊夫は明らかに不機嫌そうに首を振る。

「えー、そんなんってないじゃーん。俺、今日がんばったのにー！優奈ちゃんにマッサージしてもらえらるって思ったのにー！」

「うっさいな……。アタシじゃ不満だったの？」

和美は窓を見ながら不機嫌そうに言う。あからさまに優奈のほうが良いと言われているようにそれはそれで不満らしい。

「だってさー、カズミン、最近ゆる……」

言いかけたところで信彦がばしばしと俊夫を叩く。

「うむ、確かに今日は頑張ってたな！すまないが、少しでもいいんで時間を割いてもらえないだろうか？なに、ちょっとでいいんだが……」

「なんだよ、信彦、いてーな……」

「お前が悪い」

純一は腕組みしつつ、うんうんと頷く。

「……悪かったよ」

ようやく二人の考えを理解できたのか、俊夫は口ごもる。

「少しなら……その、大丈夫ですけど」

「そうか。なに、前みたいに熱中症になられても困るからな。柔軟を少し手伝ったら終わりでいいのでよろしく頼む」

「はい、わかりました」

いつになく寛大な計らいに優奈はほっとしていた。前のようにシャワールームで前後不覚になっては逆に迷惑をかけるのだし……。

校舎に戻ると校長先生が出迎えてくれた。

日陰に居ても汗が見える程だが、野球部の意外な活躍に上機嫌だった。

「いやあ、頑張ったねえ。報告を聞いて私も鼻が高いよ。祝勝会は……」

「校長先生、祝勝会はまだ気が早いです。我々の目標はまず全国出場、ゆくゆくは全国制覇です。どうぞそれまでお心遣いは無用であります」

キャプテンを差し置いて信彦が言うと、校長は笑顔でうんうんと頷く。

「うむ。その心意気は立派だね……。ああ、確か君達は……」

信彦達を見て一瞬言葉を飲み込む。そして横目でチアリーディング部の子達を見る。

「うむ、頑張ってくれたまえ」

一人頷くと、そそくさと校舎に引込む。その表情からは笑顔も消えていた。

前と同じく柔剣道場へと向かう六人。他の部員達は活躍の度合いに関わらず、グラウンドで練習を始める。

俊夫、信彦、純一の活躍ぶりは確かに目を見張るものがあり、野球なのに三人のおかげで勝ったといっても過言ではない。だとしても彼ら三人だけが特別扱いをされることが不思議だった。

「ねえねえゆうなちゃん、おっぱいおつきいけど何カップあんの？」

「え……そういう質問はセクハラですよ……」

「いいじゃんいいじゃん、っていうかさ、彼氏いるの？ 処女？」

矢継ぎ早に質問する俊夫に面食らう。もともと軽いタイプの彼だが、そのえぐみのある質問には不快感しか持てない。

「そういう質問をするなら、私帰りますよ……」

毅然と、けれどどこか声が震えていた。

俊夫は他二人、他の男子に比べても小さくひ弱な印象を受ける。けれど、それでも性的な質問が夏祭りの後を思い出させ、陰鬱な気持ちにさせた。

「あ、ゆーなちゃんじゃーん。どうしたの？ そのエロイ恰好。あ、もしかしてやりたくなって会いに来たとか？ 」

都合の悪いことに元凶である浩司がやって来た。弱小のバスケット部男子は他の部が出払った間しか練習時間が無い。今も野球部が帰ってきたことで切り上げられたのだろう。

「なんだ、お前……ゆーなちゃんになれなれしいな 」

お互い様なのだが他人は許せないらしく、俊夫が浩司につつかかる。

「なんだこのチビ。あっち行ってるよ 」

「チビだと！ てめえ、弱小バスケット部のクセに偉そうなことやってんじゃねーよ。悔しかったら大会出てみるよ 」

実績をつくりつつある野球部だけあって強気な俊夫。だが、個人の感情と部活の成績は必ずしも結びつくものではない。

「だからなんだ。お前、生意気だと潰すよ？ 」

背の高い浩司は俊夫を圧倒する。怯む俊夫は純一と信彦を見る。

「そのくらいにしておけ。バスケット部も揉め事を起こしたくないだろ？ 」

「なんだお前 」

「俺は野球部の時田信彦だ。バスケット部の奴らとも仲がいいから喧嘩したくないが、上下関係がわからないようなら竹中と話をしないとイケないな 」

「……てめ、竹中先輩は関係無いだろ 」

「お前も色々竹中に世話になってるんなら、迷惑かけないように気を付けるんだな 」

「ちっ……しかたねえな。先輩、生意気いってすんませんした 」

浩司はそう言うのと俊夫に深く頭を下げる。虎の威を借りる俊夫は偉そうに胸を張って

「おう、許してやる 」とうそぶいていた。

不満そうに石ころを蹴り飛ばして去って行く浩司。

そんな意外な光景を優奈はほかんとして見ていた。

浩司にも苦手な人がいる。それを信彦は知っており、多少の話し合いでまとめることができる。それはつまり、信彦を頼ること……。

「どうかしたのか？ 優奈君 」

「いえ、その、別に…… 」

「さっきのバスケット部の奴とは知り合いのようだが、あまり感心できんな 」

「はい、その、ああいういじわるなことばかりする人で困っているんです…… 」

「そうか。それは考えないといけないな 」

「私以外の子にもああいうエッチなこと言ってくるし、授業態度も良くないし、喧嘩もするから……その 」

「ふむ。そうか、なるほど、優奈君も困らされているわけか 」

「はい 」

「よしわかった。さっきのアイツのことは俺が話を付けよう 」

「本当ですか！」

信彦の提案に優奈はぱっと顔を明るくさせ、声を大きくして慌てて俯く。

「なに、優奈君にはチアリーディングで元気をもらっている。その優奈君が困らされてい
ては、元気ももらえなくなるんじゃないか。そういう困ったことがあったら教えてくれたまえ。
そうだな。早い方がいいか。おい、俊夫、純、俺は先に上がるから、お前らだけで……、
やっている。優奈君も今日は帰りたまえ」

「え、いいんですか？」

「うむ。俊夫たちのマッサージは二人に任せるし、俺も竹中と話をしておきたい。優奈君
がいてもやることないだろう？ 用があるみたいだし、今日は帰りたまえ」

「はい、ありがとうございます」

こうなると用事があるなどと適当な嘘をついたことに罪悪感を覚える。

「ただ、その、交換条件みたいで悪いが、次の応援もよろしく頼むぞ」

「はい、任せてください」

その程度簡単なこと。

優奈は頷き軽い足取りで帰路についた……。

連日の補習も優奈の特訓のおかげですらすら解ける。日下部も次の試験は大丈夫そうだと
言ってくれた。午後は野球部の練習終わりを待って芳雄とプールに行く。

その繰り返しはさすが、今日は少し違う。

柔剣道場の裏で着替えを終えた和正は腕組みしつつ、プールサイドで待っていた。

しばらくして女子更衣室となっている水泳部のドアが開き、優奈が顔を出す。

紺色のスクール水着は彼女の身体にぴちっと張り付き、曲線を滑らかに表す。

今年からデザインが変わったらしい。

変更点は胸元の締め付けの解放と、用を足す時の利便性の追求。

胸元がフラットな子はこれまで通りなのだが、性徴著しい子には胸元を拡げられるような
設計になったらしい。

胸元にファスナーが付き、それを開けると広がりおっぱいを収納できるといわれた。

最初は恥かしさもあって使用する子も少なかったが、試した子がその開放感に驚いた。

身体にぴたっと張り付くのは恥ずかしいけれど、息苦しさから解放される。ついでおっ
ぱいを大きく見せたいがためにパットを入れてかさましする子もいた。

優奈ぐらい大きくなると利用しない手はなく、恥ずかしながらもファスナーを開いた。

もう一つは股間のファスナー。

濡れた水着だと用を足すのに時間が掛かるために考案されたらしい。ファスナーを開くだ
けの簡単操作なので見た目の割に好評だった。

中には陰毛がひっかかり、痛い思いをした子もいるらしい。それはつまり、あのファスナ
ーを開けておしっこをしていたということ。それを想像すると、自然と股間が苦しくなっ
てしまう。

「お待ちせ……」

早足で駆け寄る優奈。続いて千絵と文雄、ついでに芳雄もやってくる。

人が多いに越したこともないので芳雄にはいつものように部活の後に来るように頼んだ。
だいたい事情も伝えてあるので彼は二つ返事で了承してくれた。

意外なのは千絵と文雄。二人とも塾終わりに駆けつけるようにやってきた。

プールは夏休み中の課題となっているので不思議ではないが、塾の後に疲れている身体で
駆けつけるほどでも無いと思えた。

「おう。じゃ、準備運動をしないとな」

「ちよっと、なんであなたが仕切るわけ？ 水泳部だからって生意気言わないでよね」

千絵はむっとした様子で和正に噛みついてくる。彼女も結構おっぱいが大きいので乳袋を
開いていた。それが前のめりになるとぶるんと揺れるので意識してしまう。

「まあそういきり立つなよ。別にそっちで勝手にやればいいよ」

和正は視線を逸らしつつ、プールサイドを歩く。

「とかなんとか言ってたし達の身体見たかったんじゃないの？ スケベだね」

「千絵、和正君はそれに水泳部なんだから教えられるぐらい上手だよ」

「とにかくあたしはパス。今度は下着盗まれるかもしれないし」

「おいおいおい、相沢、それは濡れ衣だぞ。結局鍵だつて和正じゃなく浜崎先生が失くしただけだったし」

険悪な雰囲気になりそうなところで芳雄が口を挟む。千絵はそれでも訝しそうに二人を睨み返し、喧嘩腰のまま。

「どうせこっそり返したんじゃないの？」

「んなことしねーって。なあ、和正」

「どうせこいつは聞かぬーよ」

「おいおい、そう言うなよ。少しは弁明をだな……。ああ、そうだ。被害物についての犯人の痕跡を辿ることだな……」

得意そうに説明する芳雄に千絵も聞き耳を立てる。

「なに？ ああ、そっか。そういうえば……」

「君達、そういう憶測でモノを語るのはやめたまえ！ さあ、準備体操をしよう」
すると文雄が金切り声を上げて話を中断させる。夏の暑さのせいか、まるでゆでだこのように真っ赤になった彼は距離を取るとへんてこなラジオ体操を始める。

「おいおい、そうじゃねーよ。まずは腱を伸ばせ。柔軟を中心にな……」

和正もこれ以上この話を広げるつもりは無かった。優奈が俯きつつあったから……。

「うお、ゆーなちやーん、本当に来てたん？ いやー、うれしいなー」

準備運動を終えて消毒槽、シャワーを浴びたところで浩司達がやって来た。

二人はシャワーも準備運動も省略してプールサイドを走る。

「おい、プールサイドを走るな」

和正は牽制しようと前に出るが、浩司は所詮チビの戯言と無視を決め込む。

「なーんだ、今日はスク水なのか、残念だわ。前みたいなエロカワイイビキニの方が良かったんだけどな」

「あれは市民プールだし、学校ではそういうのはちよつと……」

「まあいいや。おにゅうの乳袋付きの水着もエロイし……。つていうかき、優奈ちゃんもおっぱい、この乳袋に入れてるんだ」

ふっくらボリュームのある優奈の胸元に手を伸ばす浩司。もにゅんつとその柔らかさを手の内に納め、ぐにぐにと弄る。

「んっ……ちよつと、やめ……」

苦しそうに呻く優奈だが、声質は高い。

「おい、大崎！」

浩司はかっとなって浩司を突き飛ばす。すると思いのほかふらふらとよろめく浩司は、そのままフェンスにぶつかってしまう。

「……うおー、いってー！ うわー、急に暴力ふるわれたー！ なんだこいつー！」

「お、おい、なにいってやがんだ。お前が……」

「監視員さん、来てくださいよ！ 急に暴力振るってきやがったんです！」

浩司と大吾は口をそろえて大合唱。その態度を無視できず、監視員がやって来る。

「なにがありました？ 喧嘩って聞いたんですが……」

「こいつが俺のこと、急に突き飛ばして来たんです！」

「そうです、俺も見ました！」

「何いってやがる！ お前が優奈に変なことするから……！」

「変ってなんだよ？」

「それは、その、おっぱいを……」

「おっぱい？ 優奈ちゃんがおっぱいをどうされたんだ？ ん？ 言ってみろよ」

へらへら笑いながら挑発する浩司と、からかわれて真っ赤になる優奈。周囲の視線も優奈達にあつまり、おっぱいと言う言葉に男子の性的な視線が彼女に向かう。

「その……だから、とにかく、こいつらが……」

雰囲気のことを荒立てることのできない和正は口ごもるが、監視員も大吾と浩司の不真面目な態度にどちらの言い分が正しいのか大方の推測をつける。

「どうも君らの方に問題があるようだが？ それに、プール入る前はちゃんと消毒槽に入って、シャワーを浴びないと。準備運動もしてないし、そういのは困るなあ」

腕組みする監視員は浩司たちのノリに迎合せず、不機嫌そうに断ずる。

「……すんませんでした」

「すんませーん」

分が悪いと感じた浩司と大吾は消毒槽へ行くと「つめてー」と喚きながら10数え、シャワーを浴びていた。

憤慨する和正だが、監視員が公平な人で良かったと安堵する。

「すいませんでした。騒ぎ起こして」

「うん、あんまりうるさいようだも君らも帰ってもらうことになるから注意するように」

「はい」

和正はキャップを掻きながら軽く頭を下げると、大吾達を待たずにさっさとプールへ入る。疲れたふりしてさっさと帰るのが得策だと思ったからだ。

「ほら、行けよ」

浩司はプールサイドに居た文雄の背中をドンと押し、プールへ突き落す。

「うわわ！ ぎゃぱあん！」

水しぶきを上げる文雄を嗤う浩司達。監視員は笛を吹いて警告するが、彼らは気にせずへらへら嗤うばかり。

「ぶはあ、ぶぐう……」

不意の事で水を飲んだのか文雄は顔をぶるぶる振るわせていた。

「おい、インチョ、お前全然泳げないんだから和正にコーチしてもらえよ」

「は？　なんで僕がそんなことを……」

「いいからやれよ」

「……わかったよ。もちはもちやって言うしな……おい、田所……」

明らかに不満そうな文雄だが、浩司に強く言われると反論をしない。彼は和正を睨みながら近づく。

「それが人にものを頼む態度かよ。生憎だが今日はそんなつもりで来てない。ほら、優奈……」

「待ちたまえ、僕がこうして頭を下げているのに、君は無視するの……か!?!」

相変わらず和正には強気な文雄にいい加減うんざりさせられる。一発殴って舐めているとどうなるかわからせたほうがいいのかもと思えてくる。

「じゃ、じゃあ、私と一緒に和正君に教わるうよ……ね？　それなら……」

「優奈さんがそう言うなら……」

優奈の執り成しに文雄はしぶしぶ頷くが、浩司達がそれを許さない。

「待って待って、そんなに二人も三人も教えることなんてできねーだろ」

「なら、お前らが筒井の相手しろよ」

「はー？　なに言ってるんの、お前。前に市民プールで偉そうなこと言った奴誰だよ。なあ？」

「それはそれだろ。これはこれ。あの時と今じゃ違うんだ」

「知らねーよ。お前の理屈なんてよ！　ほら、優奈ちゃんはこっちで俺達と練習しようぜ。」

インチョはお前が責任もって25メートル泳げるようにしろよ」

「だから、なんで俺がそんなこと！」

「ぴー！　ぴー！　ぴー！！　ぴー！！」

声を荒げたところでまたも監視員の笛が鳴る。今度はかなり長く警告の意味合いを強めたものだ。

その音に釣られてやってくる者が居た。

「なんだ、うるさいな。何かあったのか？」

杉田だった。彼はプールの外から顔を覗かせ、またも和正が居る事にやりと「瞬笑いを浮かべてから顰め面になる。

「……まったく、またお前か……。いったいどれだけ問題を起こせば気が済むんだ？」

またも一方的な指導を行いたがる杉田に和正はうんざりさせられる。「一体どうしてここまで人をイラつかせるのか、まるで徒党を組んでいるかのようで不満と苛立ちが募る一方だっ

た。

「おら、来なさい。おい、監視員。ちょっとそいつを呼び出せ。説教をする」

喚く杉田だが、校内ならば教員。監視員よりも立場が上だ。

「……」

無言で和正にプールを上がるよう顎で示す。

「ちっ……」

舌打ちしつつプールを上がる和正は、手招きする杉田の方へと走った。

「今度は何をしたんだ？ ん？ また喧嘩か。本当にしようの無い奴だな。いいか、社会に出るということは理不尽の連続なんだ。そんな時にお前はトラブルだけ起こすのか？ 毎回喧嘩して、周りに迷惑かけて生きていくのか？ あ？」

スクール水着一つで立ち尽くす和正は仏頂面で説教という名の憂さ晴らしが終わるのを待っていた。

「なんだ、その態度は。ちゃんと聞いているのか！！」

「……」

この場所だと教頭も松子の擁護も来ない。説教が終わるのは杉田の気分次第か、それとも部活の指導……。

彼はどうしてここに居るのだろうか？ 彼は一体何の顧問だったのか？ 興味が無いせいで覚えていないが、都合よくプールサイドへやって来られる部活の顧問とは一体……？

「まったく、お前は本当にしようの無い奴だ。今からそんなんじや将来が本当に不安だな」

「はい、すみませんでした」

適当に頷き、謝罪して終わるのを待つ。プールの方からは浩司達の騒ぐ声が聞こえてくるぐらい。

優奈が心配になりちらりと後ろを向くと、心配そうにこちらを見る優奈と視線が合った。

「……………」

口をばくばくさせ、大丈夫と伝える。

「……」

彼女も頷いてくれた。

ひとまずほっとしたところで、杉田の話も終わりを迎えていた。

「以上だ。今後は気を付けるように……」

「はい、すみませんでした」

何を言っていたかは覚えていない。きっと杉田自身、覚えていないだろう。和正は急いでプールへと戻った。

「……」

プールへ戻ると、終わり際ということもあり、人影もまばらだった。

優奈を探そうとしていると、先に芳雄が気付いたらしく手を振る。

「おい、優奈は？」

「ああ。あつちで相沢と一緒に居るぞ」

彼の指さす方を見るとスクール水着姿の女子が居た。ほっと一息つき彼女らの方へ行く。

「おい、優奈く」

「あ、和正君……。良かった。戻って来たんだ」

「ああ。また杉田のありがたいお説教もらっちゃったよ……。たく、うぜー野郎だ」

「あんたが馬鹿なことばかりするからでしょ。自業自得よ」

「千絵……」

和正にあからさまな不機嫌な態度を取る千絵は、優奈を置いてすつとプールに潜った。

「ふう……」

ほっと一息つく和正に優奈はくすつと微笑む。

「どうしたの？ そんなに焦ってさ」

「そりゃ、あいつらが居るから……」

「大丈夫だよ。皆いるんだし、何もできないよ」

心配して芳雄にも来てもらったが徒労に終わったわけだった。

「それにもうすぐ先輩が……」

「先輩？」

「あ、うん。なんでもないよ」

優奈は適当に誤魔化すように愛想笑いをするけれど、そこに悲哀の色合いは薄い。むしろ何か企んでいるような、そんな狡さが見えた。

そろそろプール開放時間も終わる為、監視員が時計をチェックし始める。

「はい、それじゃあみなさんあがつてくださーい。今日の遊泳時間は終わりですよ」
「何もないまま今日は終わった。和正はフェンスに掛けたタオルで軽く顔を拭くと、目を洗ってシャワーを浴びる。浩司と大吾は相変わらずマナーを守らず、適当にシャワーを浴びると目が痛い笑いながら柔剣道場へと向かっていた。

「ほら、あたし達も早く戻ろうよ」

優奈の手を引く千絵はすれ違いざまに和正に舌を出す。とことん嫌われたものだと思いつつ、プールを出た。

次の日も和正は補習を受けていた。

朝も早くから県大会に向けて野球部が練習をしており、グラウンドには応援の声が響く。和正は優奈に前日に手伝ってもらった課題を提出し、新たな課題に頭を捻っていた。

最近では優奈に教えてもらったので、勉強の方もはかどっていた。模擬テストでは満点近い点数を出し、次は赤点どころか上位目指して頑張れと言われたほどだった。

今日も補習後にプールがある。また浩司達が誘ってきたのだ。だが、いくら彼らでも芳雄や千絵、文雄が居る中で手出しなどできないだろう。そう楽観視していた。

曇り空の下、グラウンドでは白球を追う部員の姿が見えた。

その中には芳雄も居る。今日は練習が長引いてプールに参加できないとのことだったので不安だが、文雄や千絵も居るのだから十分だろう。

「和正くん！」

プール脇の道を通っていると、優奈と千絵、文雄の姿が見えた。一人駆けだす優奈は嬉しそうに手を振る。まるで飼い主に会えた犬が尻尾を振るように。

「おう、優奈」

「待った？」

「いや、今さっききたばっか。ほら、さっさと行けよ」

「もう、そうやっていじわるする……」

「何が意地悪だよ。ここは男子の着替える場所だろ」

「え、ここ外だよ？」

「そうだよ。男子は外で着替えるの。柔剣道場の裏な」

周りを見るも特に荷物は無い。けれど、文雄もやってきて荷物を置くのでそれが真実だとわかり、優奈は真っ赤になって更衣室へと走って行った。

「何やってんだか……」

和正は肩を竦め、着替え始めた……。

シャワーを浴びて消毒槽につかる。軽く柔軟体操をしているが誰も来ない。利用者がいないのは曇り空がぐずつきそうなのが原因だろうけれど、千絵と優奈が遅いのは不自然だ。

同じ水泳部の女子の先輩たちならてきぱきと着替えるので、余計に遅く感じてしまう。

「おい、どこへ行くんだ」

気になって様子を伺いに行こうとしたところで文雄に止められる。

「様子見に行こうと思ってな」

「何が様子だ。本当は覗こうと思ってるんだろ！ 本当に君は嫌らしい奴だ」

「うるせーな。実際遅いだろ。外から聞くだけなんだからがたがた言うな」
和正もいい加減文雄の相手がばかばかしくなり、ぞんざいに答えるとプールを出た。

とはいえ、やはり女子が着替えている部屋に声をかけるのは気が引ける。部室の前まで来たところで手をこまねいていた。

「田所君？」

すると聞き覚えの声が出た。見ると春子が居た。彼女はプール帰りだったのか、髪が濡れていた。

「北村さんか。ちようどいい。悪いんだけどさ、優奈……、市川さんが遅いから、ちよつと気になったんだよ。でも、今はここ女子更衣室だし、声をかけづらくて……」

「なんだ。そうだったの。いいよ。私が見て来る」

ほっとした様子で春子はドアノブに手をかける。和正は慌てて背を向ける。

「……だれも居ないけど……」

「ホント？」

見ようとして手て顔をおさえられる。

「見ちゃダメ。誰かの着替えがあるんだから」

「すまん……。でも、優奈はいないんだな？」

「そうみたい。どこだろ……」

「……んっ……。べちよ……。ぬちゅ……。ごく……。んぐ」

「……へへ、そうそう、上手じゃん……。ゆ……。ちちゃん」

不意に声が聞こえた。

「誰か居るのか？」

和正が声を上げると、がたつと隣で音がした。

隣の部室は野球部。ドアが半開きになっており、誰も居ない。

もう一方は男子バスケット部の部室。はっと気づいてドアノブを掴む。

「うわっと」

中から大吾の声が出た。

「おい、誰か居るのか！ 開けろ」

和正は声を荒げどんどんとドアを叩く。

「なんだよ、田所か。今着替えてるんだよ。邪魔するなよ」

「何が着替えだ。男子は柔剣道の裏だろうが」

「いいだろ、バスケット部なんだからバスケット部の部室を使っても……」

「開けるぐらいでもいいだろうが。どうせいつもフルチンになって着替えてるんだか

らよ」

「うっせーエッチ」

「なにがエッチだこのバカ野郎」

「……開けられるかっての……え？ ああ、ちよつと待て……鍵開けるからよ。ドアノブ
掴まれると鍵動かなくなるんだよ」

「……」

一旦ドアノブを手放すと、中がちゃがちゃと音がする。そしてきいと音を立てて開く。
「ったく、ただでさえ立てつけ悪いのにどうしてくれるんだよ」

大吾がぶつくさ言いながら開くと、和正はがごと身体を隙間にねじ込ませるようにして入る。

部室には古びた教壇があり、浩司がふんぞり返っていた。

「なんだよ。俺ら今着替え中なんだけど？ お前、まさかホモか？」

「なに言ってるやがんだ」

「なにして……、なあ？ なんでわざわざバスケットに来るんだよ？ 入部希望なら部長の

居る時にしろよ」

「ふざけんな。お前、なんか隠してんだろ！」

「ああ。隠してるぞ」

「やっぱり！」

かっとなる和正はずかずかと部室に入っていく。

「何を隠してた！ 正直に言わないとただじゃ置かないぞ！」

「俺のデンジャラスマグナムだよ」

そういつて教壇からぬらっと濡れたチンポを見せた。

「きゃっ！」

後で見ていた春子が真っ赤になって顔を背ける。

「ぎゃはは、なにがきゃっだよ、ぶーす！」

そんな彼女の反応を嗤う大吾達。

「ほら、わかったら出ていけ。つか、お前、血が出てるぞ？」

「あ？ ……」

無理に身体を入れたせいで背中を切ったらしい。和正は腕で拭いむりに抑える。一旦血が
とまるけれど、すぐに滲む。

「ほら、もういいだろ。俺らも着替えたいんだよ。そのうち優奈ちゃんもくっからよ」

うるさそうに背中を押されて追い出される和正。背後ではばしんと扉が閉められた。

「大丈夫？ 田所君……」

心配そうな春子は鞆からティッシュを取り出す。

「これぐらい平気だ」

「だめだよ。みんなで使うんだし、保健室でばんそうこうもらってこよう。それに市川さ
んが見たら不安がるよ？ また喧嘩したのって」

「わかったよ」

春子の言うことももっともだと、仕方なく保健室へと向かった。

夏休み中だが、プールの時間だけは緊急の為に松子が在室していることがある。今日は居ないらしく、鍵がかかっていた。

和正は下の通気口から潜り込み、ばんそうこうを二つ三つ拝借してぺたぺたと貼る。

「よし、これでいいか」

見映えは悪いが血は止まったので、改めて優奈を探そうと急ぐ。

「あれ？ 市川さんじゃない？」

窓の外を見ていた春子がプールの方を指差して言う。すると部室棟から出る優奈の姿があった。

「なんだ。居たのか？ でも、更衣室には居なかったし……」

「入れ違いになったのかしら？ それともトイレとか……」

「そっか。そうだな。わりい、手間取らせたよ。そんじやな」

「別に私は……。あ、田所君、それじゃね……」

春子はまだ何か言いたそうだったけれど、今はそれどころではない。浩司達が居る限り、気は抜けないのだから……。

プールへ戻ると、優奈の姿が見えた。

雲行きが怪しくなったところで利用者も少ない。目でざっと確認すると、自分達を含めた七人だけだった。

心配している浩司と大吾は逆方向で文雄をからかっているので安心できた。

「和正君……どこいったの？」

プールサイドへ戻ると優奈が声をかけてきた。

「ああ、悪い。その、優奈が見えなかったから探してて……」

「もう……それより傷、大丈夫？」

「ん？ ああ。こんなのかすり傷だよ」

「そっか。心配しちゃったよ。和正君、すぐ無茶するから」

「いいじゃねーか……ったく……？」

なんとなく引っ掛かりを覚える。何がおかしいのだろう。

「どうかしたの？」

「いや、別に……」

「それより早く早く……」

「ああ。それじゃ……」

「待て待て！」

和正がプールへ入ろうとしたところで監視員が口を挟む。いつもならOBなのだが、今日はなぜか杉田だった。

「お前ちゃんと準備運動したのか？ 全く、水泳部だからといって調子に乗るな！」

プールへ響く怒声に和正は辟易していた。どうせ話したところで頭ごなしに否定してくるだけ。彼とは同じ言語を別の次元で発生し合うだけの関係なのかもしれない。

「はいはい、わかってますよ。ちゃんと準備運動しますよ」

和正はプールサイドで二度目となる柔軟体操を始める。

「おい田所。お前は水泳部なんだから第5レーンを使いな」

「は？ 別にそういう使い方の区別は無いはずですが？」

「夏休み中のプール利用は遊びで貸し出してるんじゃない。お前は水泳ができるんだから、しっかりと練習しろ」

「……」

「往復30を終えるまで帰るんじゃないぞ。いいな」

「……」

「もしさぼるようならお前は停学だ」

「なんだそれ。なんで自由参加のプールで……」

「そうですね、先生、そんなの……横暴です」

珍しく優奈が口を挟む。

「ちょっと優奈、やめなよ……。田所なんて庇ってもいいことなんて無いよ」

「だって、先生は変ですよ。どうして急にそんなことを……」

「これは指導だ。口出しするんじゃない」

「でも……」

「いって、優奈。たかが往復30くらい……」

「ほう、言ったな、田所。できなかつたら停学だぞ？」

「先生こそ知らない分野で粋がらない方がいいですよ。水泳部がたかが2キロも泳げなかつたら物笑いの種。せめてその三倍じゃないと」

和正はそう言うと第5レーンから飛び込んだ。本来なら禁止されているのだが、挑発したのは杉田の方。和正は手始めにクロールから始めた……。

ターンの度に周囲を見る。大吾たちは一レーンの隅っこで水しぶきを上げて遊んでいる。その隣のレーンで女子二人が泳いでいるのが見える。

約束の往復30まであと20程度。本当なら適当にサバ読んでしまいたいが、監視員の杉田がきっちりレーンに立っている。

よくそこまで固執できるものだと思います。つつ、久しぶりに思い切り泳げることもあって変な感謝をしていた。

「終わりましたよ。これで問題無いですよね？」

残りを終えたところで和正息を着いた。水泳部とはいえ疲れたのか、肩で息をする。

「……ふん、水泳部だからっていい気になるなよ」

杉田は目論見が甘かったことに眉間を寄せていたが、今から追加では示しがつかず、苦々し気に監視小屋へ戻った。

そんな後ろ姿を見送りつつ、和正は優奈の元に戻ろうと周囲を伺う。一レーンの方で泳ぐ二人を見つけ、レーンをくぐって向かう……が、二人は逃げるようにぐるりと回る。

「……？」

一レーンまで来たところで二人は五レーンへ向かう。そこは水泳部の意地。多少のリードなど気にせず、二人に追いつく。

「なにやってるんだよ。今度は鬼ごっこか？」

女の子の前まで泳ぎ切り顔を上げると、そこには別の女子が居た。

「なに？ なんか用？」

「……あ、あれ？ 優奈じゃない？ 相沢？ あれ……」

もう一人の女子は千絵なのだが、目の前の子は奈津子だった。彼女はつまらなそうに和正を睨むと、もう用はないでしょと去って行く。

「おい、相沢、優奈は……」

一緒に居たであろう千絵に尋ねると、彼女はくいつと一レーンの方に顎を向ける。

そこには大吾と浩司が居る。たまに水しぶきを上げるのが見えたけれど、浩司はずっと隅っここで背を向けたまま……。

胸にぐわっと嫌な感じが溢れる。吐き気とも痛みとも違う、ぐるっと裏返しされたような気分。でかかった気持ち飲み込み、急いで二人の方へ向かう。

まるでトビウオのように跳ねるバタフライで……。

「……う？ なんだ。うわ！！」

プールサイドに掴まりながらバタ足をしていた大吾は、石けりの石のように水面を跳ねて近づく和正に面食らう。

「な、なんだよ、急に！」

「おい、浩司！ 大吾、なにやってるんだ！」

「あー？ なんだよ？ 急に……俺が何してたってどうでもいいだろうが……」
背を向けたまま、浩司は答える。

「まさか、お前、優奈に……」

「優奈ちゃん？ ああ、優奈ちゃんならなあ……けけけ……」

くすくす笑う浩司にいよいよ嫌な気持ちが高潮になり、和正はその肩を掴んでむりやり引き剥がす。

「くらえ！」

と同時に水しぶきを顔面にくらう。

「どうだ！ くらえ！」

大吾もそれに倣って和正に水しぶきを浴びせる。けれど水泳部の和正はこの手のじゃれ合いは慣れた物。すぐに水中へと潜ると、距離を取る。

「お、なんだこいつ、逃げるのか？」

「……？」

水中で見た限り、そこには浩司と大吾だけだった。

「お前ら、優奈はどこだよ」

「優奈ちゃん？ 知らねーよ」

「じゃあ何やってたんだよ」

「俺はここでバタ足の練習してたんだよ」

「浩司は？」

「おれ？ 俺はこれ、ここ」

足元を指差すので見るとそこには排水溝。水が吸い込まれる流れを感じられるので、時折人だけができる謎ポイントだった。

「なんかくせになるからここで遊んでたんだよ」

「……ガキかよ、お前は……」

「いいじゃん。穴に入ってくのって気持ちいいんだしよー。ああ、童貞のお前じゃわかんねーか？ なっはっは……」

げらげら笑う浩司の相手をするのもばかしく、和正はきよろきよろと辺りを見る。すると消毒槽の方から優奈がやって来るのが見えた。

「あ、おーい、優奈」

「あ、和正君……」

「なんだよ、どこ行ってたんだよ」

「えと、それは……」

口ごもる優奈に和正はまたも体温がさっと冷める。

「おいおい、そういうの聞くなよ……。お前にはデリカシーってもんが無いのかよ」

「え？」

「優奈ちゃん、どっから出て来た？」

「そりゃ……しょうど……」

言われてようやく気付く。

プールから出たら一旦消毒槽に入る。つまり優奈は……。

「すまん、俺が悪かった」

和正は水面に顔を潜らせ、ごぼごぼ言いながら謝罪の言葉を並べた……。

雨が降り始めたところでプールからあがるよう言われた。

西の空でごうごうと雷鳴が轟き、千絵達はシャワーもそこそこに逃げるように更衣室へ走った。

「おい、田所、コースロープ片付ける。風が出て来た」

本来なら監視の仕事のはずなのだが、杉田は水着ではない。コースロープが切れると水泳部の練習でも困るので、仕方なく外して回る。

その内に雷鳴響き、本降りになる。

「くそ、なんでこんな日にかぎって……」

コースロープを纏め上げて屋根の下のベンチにまとめる。この雨でシャワーも無いだろうとおもいつつ、律儀に目を洗う。

フェンスに掛けたタオルはそれほど濡れておらず、お腹に隠すようにして柔剣道場裏を指した。

身体を拭いて着替えるも、この雨では結局ずぶぬれになるだけだろう。傘も持っておらず、どうしたものかと空を見る。

西の空には暗雲が立ち込めており、しばらくはやみそうにない。

ふと優奈が気になり、部室棟を見る。まだ明かりが見えるので、中にいるのだろう。

「おい、優奈？」

窓越しに声をかけると、がらりと戸が開く。

「な、なに？ 和正君」

「傘持ってるか？」

「えと……んっ……と、かさ……？ かさは……ないけど……あう……」

雨で聞き取りにくいが無いのは伝わった。

「そっか。まいったな……どうすっかな……」

「う……うん、えと、その……はあん……だから……おねがい、今は……やめ……んっ……

…

「どうかしたか？」

顔を歪める優奈に和正は訝しむ。どこか彼女の顔は赤く、ふるふる震えているように見える。

「な、なんでもないよ。ちょっとその……ほら、んっ……と、えと……んふう……その、背伸び……してるから……だから……ね？」

「はは。というか、窓開けてたら覗かれちゃうぞ？　ちゃんと閉めるよ」

「んっ……うん……わかった……しめる……ね」

「んじや、俺は傘借りてくるから、そしたら一緒に帰ろうぜ」

「う……うん……うん、んっ……うん……わか……った……ああん……うん、おねがい……和正君……いそ……いで……ね？」

「ん？　ああ。そうだな。今日も課題やらないといけないもんな」

「ごめ……ん……きよう……ちよつと……その……、たい……んっ……ちよう……わるい
かも……だから……先に……やっぱり、一人で……いく！　いって……いっちゃって……
……」

「ん？　ああそうなのか？　心配だから一緒に……」

「一緒に……いくのは……いや！　……なの……だから……その……」

「そうか……わかったよ」

いつになく強い口調で拒む優奈に和正は頬を掻く。せつかく前のような関係に戻れたのに、また後退。とはいえ何事も急いで事は仕損じる。

和正はふうと一息ついて気持ちを整える。

「なあ、優奈……」

それでも取りすがろうと声を掛けるが、窓がぴしやりと閉まる。

優奈は今着替え中。

そう自分に言い訳し、和正は校舎へと走った……。

古そうな傘を二つ選び、未練がましくも部室棟へ戻る和正。

既に電気は消えており、人気は無い。

「……？」

ふと違和感を覚えた。何がおかしいのだろう。すぐにはわからない。

和正は水泳部室のノブを回す。鍵はかかっておらず、なんの抵抗も無く開いた。

「あれ……」

部室の中は整頓されており、窓のカギは開いたままだった。

「なんだよ、ちゃんと閉めて帰れよ」

優奈もどこか抜けているなと思いつつ、鍵を閉める。

「……？」

またも違和感。何がおかしいのだろうか？　やはりわからない。

じつと柔剣道場裏を見ながらしばらく悩む。

先ほど何か、記憶のどこかが少しずれている。そんな気がした……。

その日、補習を終えた和正は高台で優奈を待っていた。

先日は雨のプールの後、結局会えずじまいで別れ別れになってしまった。

電話をしようと思ったが、優奈の母が取り次いでくれるとは思えない。どうせだめだとう諦めが先行し、もやもやした気持ちのまま過ごしていた。

「……お待たせ」

暇つぶしに課題のテキストを読んでいると、息を切らした優奈の声が聞こえた。

「なんだよ、遅いじゃないか」

できるだけいつものそっけない態度を装い振り返り、面食らう。

夏真っ盛りだというのに優奈は長袖のパーカーを羽織っていたからだ。しかも首元までしっかりとファスナーを閉めている。

「なんだよ、暑くないのか？」

「うん。暑いけど、紫外線対策だよ」

ぎこちなく笑う優奈の額には汗が滲んでいた。

「そうか……。まあいいけど、熱中症には気を付けろよ」

「うん。でもここは涼しいし平気だよ」

高台は風が吹き抜けるようで夏でも涼しい。日差しも屋根が遮ってくれるから平気。多少の虫刺されを我慢すれば……。

連日の優奈の指導で課題もなんなくこなせた。その分だけ静かに時間は過ぎていく。

優奈はゼミの勉強を進めており、和正も気になって前日の分を見せてもらった。

長い英文の羅列に拒否反応を示す和正に優奈はくすつと笑う。

「長いけどそれほど難しくないよ。少しずつ読んでごらんよ」

言われるままに少し読んでみる。知らない単語もいくつかあるけれど、辞書を片手に読むこと数分、優奈の訳と同じ結果にちぐはぐながら辿り着けた。

「……ってな感じか？」

「うん、だいぶ頑張ったね。次はここを読んでみよっか？」

「……なんかハードル上がってないか……？」

藪蛇と思いつつ、今日の課題はもう終わっている。それなら優奈がどれだけゼミで頑張っているのかを知る良い機会だと、取り組んでみた……。

「うーん、ここの構文は……」

「それは定型文だよ。これね」

「ああ、そうなのか……」

「うん。で、こっちが……」

優奈は自分の勉強の手を止めて和正を見てくれる。躓いたところを適宜教えてくれるのでわかりやすく、すらすら進んでいった。

「おお、なるほど……、なんか頭が良くなった気分だ」

最初は無理だと思っていた英文だが、多少の主語のまどろっこしさは残るものの、なんとか意味の通る程度に訳すことができた。

「おめでとー！」

ぱちぱちと手を叩く優奈に和正は彼女のおかげが半分以上ながら少し誇らしかった。ただ、彼女はその量の英文を三倍の速度で訳しており、まだまだ溝は深い……。

「ふう……、なんだか汗かいた……」

いくら風通しが良いとはいえパーカーを着ていることもあって優奈は顔、腕、首筋とたまのような汗を作る。

下敷きで煽ぐ彼女ははしたなくも首筋をそっと引っ張る。

「脱げばいいじゃん」

和正は強情な彼女を笑いつつ、ちらりと見る。

「……ん？　なんだ、虫にでも刺されたか？　首筋、赤いぞ。待ってる。ちゃんと虫刺され薬あるから……」

和正は靴から軟膏を取り出して差し出す。

「うん、ありがと……」

汗を拭う優奈の表情はなぜか硬くなっていた。彼女は背を向けると服をひっぱって首筋をなぞる。

「ありがと」

「ああ、まあ、その……」

突っ返される軟膏に気圧される和正は変に焦る優奈の態度に呆気にとられていた。そのせいで地面に落としてしまう。

「おっと……」

地面におちた軟膏を拾おとしてしゃがみ込む。転がった先に手を伸ばすと、そこには優奈の足があった。

紫外線対策と言うわりにスカートは普通に膝上数センチ。内腿には虫刺されの痕……？

「足は大丈夫か？」

「え？　何？」

裏返った声とぱっと膝を閉じる優奈。その動作に和正は自分がまたもデリカシーの無いことをしたと悟る。

「ああ、すまん。そういうつもりじゃなかったんだ……。その、やぶ蚊が多いし、スカートだと厳しいかなって思ってた……」

「……………」
ぱっとスカートをめくって自分の足を見る。優奈は真っ赤になって和正を睨み、涙をにじませていた。

「ご、ごめん。その、覗くつもりじゃなくて……………その……………なんだ、悪かったよ」
「……………」

ぶんぶんと首を振る優奈は鼻を吸りだす。

「悪かったよ。その、セクハラみたいなことして」

「ちがうの……………そうじゃなくて……………」

ぐずりつつ首を振る優奈の言葉は要領を得ない。

「どうかしたのか？ 最近変だぞ？」

「んーん、大丈夫……………大丈夫だから……………おねがい……………」

軟膏を取る手を優奈が掴む。まだ軟膏が必要なのかと思うもそうではないらしい。彼女は少し締め付ける程度の和正の腕を掴む。爪が後をつける程度に……………。

「……………大丈夫か？ もしかして勉強辛いとか？ それとも……………」

「……………うん。でも、和正君、気にしないで……………。あたし……………頑張れるから……………」

「本当か？ まあ、そうならいいけどさ」

「……………うん。だから少し、休むね」

またもふわっと風が吹く。吹き抜けるそれは夏のほてりを冷ますのか、少し眠気を誘った……………。

日も陰ったところで高台を降りる二人。自転車の荷台に優奈を乗せつつ、坂を降りる。

「ね、あのさ、もうちょっとゆっくり……………」

「ん？ これでも十分ゆっくりだと思うけど……………」

二人乗りの自転車だとブレーキの減りも早い。せこいと思いつつ、いつも通りなのにと不思議がる。

「ちよっと……………痛いかなって思って……………」

「そっか？ んじゃ降りるか？」

「あ、うん。歩こっか……………。二人乗りはだめだし」

ききつと自転車を止めて降りて歩く二人。夕暮れ時、日差しが和らいだものの、まだ暑い。

少し歩いた程度でもう玉のような汗を浮かべる優奈に、やはり自転車に乗らないかと差し向ける。

「いいよ。「一緒に歩きたいし」」

「そっか」

優奈がそうしたいというのであればそうしてあげたい。和正は自転車を道路側に出し、ブ

レーキをきいきい言わせながら歩いていった。

「……あ」

坂を降りたところで優奈がぼつりとつぶやく。視線の先には文雄と浩司が居た。

珍しい組み合わせと思いつつも引き返すも、既に二人に気付かれていた。

優奈が自然と背後に隠れるので、和正も大丈夫だとばかりに彼女の手を握る。握り返される汗ばんだ手に気持ちを引き締め、二人の方へと歩いて行った。

「優奈さん、なんで今日さぼったんだい？」

文雄は開口一番、優奈にそう告げた。

「……ちよっと、その、気分が悪くて……」

「ふーん、気分が悪いのに田所と一緒に遊んでいたのか……。呆れるね。君はそうやって逃げるのか？」

「逃げるなんて、そんな……言い方……」

「おい、筒井、それは言い過ぎだろ。優奈だって息抜きぐらい必要だろ。そんなに根づめなくたって……」

「そりや君みたいな落ちこぼれならね。でも優奈さん、君はやればできる人じゃないか。選ばれた特進クラスなんだよ？ クラスを維持しようと皆が頑張っているというのに、君はそうやって怠けて恥ずかしくないのか！？」

「……」

青筋立てて捲し立てる文雄に和正も浩司も若干引き気味だった。

「受験はまだ一年以上ある。けれど、遊んでいたらすぎ。楽しい時間はすぐ過ぎるからね。僕だって遊ぶなどは言わないさ。けど、そうやって自分に甘く逃げていたら、君もその田所と同じ落ちこぼれになるんだよ」

「和正くんは落ちこぼれじゃないよ。水泳で大会に出られるし、勉強だってちゃんと教えて……。それに、教えるのは自分の力になるって、筒井君だって前に言ってたじゃない」

「何が大会だ。どうせ市の大会程度じゃないか。そんな程度、なんの自慢にもならないんだ。勉強だってそう。君はそうやってレベルの低い田所に教えて何を学んだきになるんだい？ そういう甘えと同情はうんざりだ。僕はがっかりだよ。優奈さんは一緒に受験戦争を戦い抜ける人だと思ったのに。もう進学クラスを辞退したらどうだい？ 相沢さんはゼミが終わっても自習室で補習するぐらい頑張っているからね！」

優奈の反論を予期していなかったのか、文雄はさらに早口になり、口を挟ませまいと必死になる。

「はあはあ……」

言いたい放題言ったところで息を着く文雄の額には汗がにじむ。

「ま、イインチョは真面目ってこったな。それに比べてゆーなちゃんはワルだねえ……」

つていうか？　なんでそんな厚着なん？　夏なんだし、脱ごうよ、そんなだばいもん」
浩司はへらへら笑いながら優奈のパーカーに手をかけ、ぐいっと下げる。

「やめ……やめてよ……」

悲鳴に近い声を上げる優奈。和正は即座に浩司に掴みかかる。その反動でパーカーが引つ張られ、腕が抜ける。

「お前、何してんだ。ふざけんよ」

「いいじゃん。夏にこんな厚着してるゆーなちゃんがおかしいんだし」

にらみ合う浩司と和正。余裕ぶりたい浩司だが、胸元をねじあげられ、それを解けずに徐々に噛いが消える。

「てめ、離せよ……」

「お前が優奈に謝るって言うんならな……」

「なにがだよ。別にゆーなちゃんは何もいってねーじゃん」

「さっきやめてっていったろうが！　ふざけるなよ」

「なに？　正義の味方気取りかよ……うぜーんだよ、そういうの……」

「俺はそんなお行儀良くないぞ？」

「は？　やれるのかよ？　お前みたいな根性無しのチビが」

「やってやるよ！」

腕を振りかぶる和正に浩司は反射的に身構える。

「優奈さん！　それはいったい……」

そんな二人に水を差すのは文雄の驚いた声。彼は優奈を指差し、震えていた。

「……………」

無言で身体を抱くようにする優奈を見て、和正は何がそんなに驚くのかと首を傾げる。一方で浩司はにやにやほくそ笑んでいた。

「どうかしたのか？」

訳が分からず二人を見る和正。よく見ると、優奈の腕や首筋、太腿には赤い点がいくつも見えた。虫さされにしては痕が縦に長く……。

「き、き、きみは……ゼミを休んで……僕らが勉強しているあいだに……な、な、なんてはれ、はれんち……ふしだらだ！」

口をパクパクしながら優奈を指差す文雄。眼鏡がずれていたが、瞬きもせずじろじろと全身を見ようと頭ごと上下させる。

「なんだ？　急に……そりやゼミさぼったのは俺も初耳だけど、そんなこと言われるようなことなんてしてないぞ？　なあ、普通に一緒に勉強してただけだろ？」

「うん……そうだよ」

裾を伸ばして腕を隠そうとするが、そうすると今度は首筋が広がってしまう。優奈はそれに気づいて慌てて放す。

「おらおら、イインチョ、ゆーなちゃん困ってんじゃない。そういうのやめような……」

ぐいっと無理やり口を押え込み、そのまま乱暴に振り抜く。ふらつく文雄は口をおさえてよろめくが、それでも視線は優奈に向けていた。

「色々悪い虫がいるとか？ はは、ま、お前もせいぜい気を付けろよな」

浩司はげらげら嗤いながら文雄の肩を押して無理やり帰す。

「おい、待て！」

その態度に煮え切らず、いらいらした和正はなおも食い下がろうとしたが、手を掴む冷たい感触に止められる。

「待って、和正君……いいの。もういいから……」

「いいって、でも、優奈……」

「お願い。もういいの」

「……わかったよ。ったく、なんだよ、あいつら……」

「それより、ごめんね。私、ゼミする休みしてたの黙ってた」

「……うーん、その、なんだろ。それは優奈が決めることだし、俺がとやかういことじゃないというか、俺も勉強教えてもらってるから、むしろ俺の方こそ悪かったよ」

「……うん。その、明日からはちゃんと行くから……」

「ああ。その、さつき筒井が言ったことなんて気にすんなよ。なに、優奈ならすぐに追いつくし、追い越せるって……」

「筒井君は……うん」

優奈はパーカーを羽織り直し、暑さに耐えながらも両肩を抱いて震えていた。

「どうかしたのか？ ま、あいつらがまたなんか余計なこととして来たら、俺がぶつとばしてやる」

「だめだよ、そんなことしたら和正君、停学になっちゃう。和正君が居なくなったらやだよ」

「……そんな簡単に停学なんてねーよ……心配しすぎだって……」

「でも……だって……」

「わかったよ。乱暴なことしないから……大丈夫。約束するよ」

度重なる浩司の嫌がらせと、さらに文雄も加わってしまい、どこまで耐えられるか和正自身わからなくなっていた。

「……うん」

「でもな……その、うん、頑張るよ」

「……うん」

ただ、袖を掴む彼女の力が、それを繋ぎとめようとしていた……。